特集

時代が彼にあこがれる 知の巨人 南方熊楠。

博物学者であり、生物学者であり、民俗学者でもある。
研究分野は、粘菌、キノコ、動物、人間、宇宙……、
あの世この世のすべてのこと。
膨大な資料を残しているが、
いまだ全容は明らかにされておらず、
海外渡航やエコロジー思想などから浮かび上がる
その人物像は、現代にして“未来的”。
奇想天外、森羅万象を見つめた
知の巨人・南方熊楠の世界を覗く。

参考文献／「南方熊楠アルバム」（中瀬喜陽ほか編、八坂書房）
「クマグスの森 南方熊楠の見た宇宙」（松居竜五ほか編、新潮社）
「奇想天外の巨人 南方熊楠」（荒俣宏ほか著、平凡社）
協力／南方熊楠顕彰館

Essay

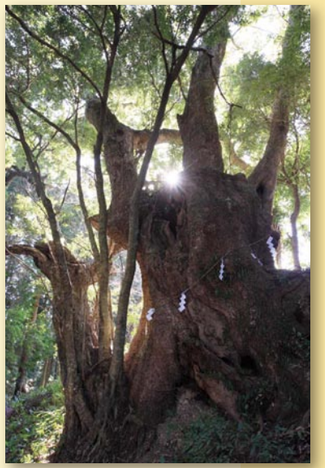
コスモの魂 熊楠に学ぶべし

文 中上紀

南方熊楠の、ただひたすら自身の興味と夢を追求した生き方に憧れる。熊野を飛びだし日本を飛び出し米国、キューバ、英国に渡り見聞を広げ、大英博物館で働いたり、『ネイチャー』に論文が掲載されたり、革命家孫文と親交を深めたりし、資金難によるやむなくの帰国後は、那智の山で土壌の宇宙を飽くことなく見つめ、外国の学者と標本を送りあい、神社合祀反対運動の中心となり、昭和天皇に進講し、菌類学のみならず博物学、民俗学、天文学、人類学、考古学、生物学と、多分野の研究の発展に大きな影響を与えた。まさに巨人・熊楠。マクロとミクロを自由自在に行き来する彼のスケールはもはやコスモの次元としか言いようがない。

那智での〝籠り〟の時代、熊楠は那智山に入って粘菌の観察と採取に勤しみながら、しばしば奇妙な体験をした。眠っている間に魂が抜け出して山中をさ迷い、珍しい植物を見つけ、翌朝同じ場所に行ってみると、本当にその植物が在る。古来より人はこの地に〝籠る〟ことで癒され再生し、あるいは何らかの超次元的な力を得てきた。役行者（えんのぎょうじゃ）しかり、小栗判官（おぐりはんがん）しかり。熊楠は、山中を自由自在に浮遊し、海を越えて世界へ飛ぶ。彼の曼荼羅の中では、すべての生物が、人が、宗教が、歴史が、繋がっていた。那智の原生林に寄生する苔や粘菌の視点から見たら、田辺も東京もロンドンも、さしたる距離の違いはない。そこからすると、孫文が田辺まで訪ねてくるのも、何だか〝普通〟のことに思えてしまう。現代ならまだしも、鉄道でさえ田舎では珍しかった明治時代の話である。それほどまでに未来的にしてグローバルな器の持ち主が、百年前の熊野に居たのだ。

それにしても、〝熊楠〟という名は、それそのものが彼の人生であるかのようである。熊楠の熊、クマノのクマは〝隈〟であり〝陰〟であり〝曲〟である。隅っこにある暗くて曲がった場所。隅っこは中央に対しての位置、つまり辺境、〝暗くて曲がった〟は、この世のものではないとか、そんな風に置き換えても良い。中央からはみだした根の国熊野、異類異形の住処熊野、むき出しの自然、荒ぶる神々の地熊野と、学位や名誉といった〝中央〟が作ったものさしには目もくれなかった天才、奇想天外の巨人熊楠は、どこか似ている。そして、彼が投獄されてもなお身体を張って守ったおかげで神社合祀による伐採を免れ、いまでも力強い枝を空に向かって伸ばし、鳥や虫たちを育み日差しを避け木陰を求む者の安らぎとなっている大楠たちのごとく、熊楠はおおらかに紀伊半島に横たわりながら、我々が暮らす森羅万象の行く末を見守っている。二十一世紀になって十年が経った今こそ、熊楠に学ばなければ、嘘である。



高原熊野神社の大楠。（楠本弘児撮影）

植物採集へ出かける熊楠（右端）。（南方熊楠顕彰館所蔵）

Profile
中上 紀（なかがみ のり）
作家。1971年東京生まれ。ハワイ大学美術学部美術史科卒業。『彼女のブレンカ』ですばる文学賞受賞。著書は『イラワジの赤い花』『夢の船旅 父中上健次と熊野』『悪霊』『水の宴』『シャーマンが歌う夜』『月花の旅人』『海の宮』ほか多数。最新刊は『熊野物語』（平凡社）。

『熊野物語』
浮島の森で蛇に乗り移られた少女、土車を引いて湯の峰をめざした遊女……熊野に伝わる物語を熊野にルーツを持つ筆者ならではの感性でつむぎ出した連続短編集。南方熊楠をモチーフにした物語も。